

明使趙秩とその山口十境詩

田 梅・荒巻大拙

- 一、明国皇帝の使者趙秩
 - 二、趙秩の山口入り
 - 三、山口十境詩について
 - 四、山口十境詩の訳注
- おわりに

一、明国皇帝の使者趙秩

明の趙秩は生卒年不詳、「字を可庸、齧雪道人、官は洪武中、萊州同知、詔を奉じて日本に使う」（諸橋大漢和辞典）と書かれている。（元代、宋の太祖の後裔趙孟頫の子孫で、趙孟頫の号は「松雪道人」であるから、趙秩は「松雪公孫」とも自称した。）

趙秩は明国皇帝の使者として、史料の上で、二度日本に派遣されたことが確認できる。

1368（明洪武元・日本正平23）年、大明帝国を創始したばかりの太祖洪武帝は即位して間もなく、日本に使節を派遣したが、日本に向かう途中、五島列島（長崎県西部の列島）のどこかで賊に殺され、詔書も破棄され、海に投げられた。

翌年、「新王朝の樹立の宣言」「朝貢の要請」「倭寇の禁圧の要請」の書簡を持つ二回目の使節、楊載ら7人を派遣して、大宰府の懐良親王に謁見をもとめさせた。ところがその国書の内容があまりにも高圧的であったために、上記の勅書を読んだ懐良親王は、南朝、後醍醐天皇の子であるから、中国に臣下の礼を取ることなど絶対に許さず、朝貢もきっぱりと拒絶してしまった。使節団のうち、五人は殺死せられ、楊載・呉文華のみ3か月羈留という命令を下した。拘留の後、楊載・呉文華はようやく釈放され、辛うじて明国に逃げ帰った。

1370年3月、3回目は趙秩を遣日正使とし、楊載も案内役に加わった使節団を日本に派遣した。国書の内容は前回のものとほとんど同じであるが、新たに「他の諸国は既に朝貢に応じている」ことが書き加えられていて、明帝国の強大さを誇示する意図があった。さて、懐良親王は「何度来ても同じだ」と表明し、さらに「趙秩」という名前によって、元寇の直前に元朝から日本に朝貢を要求した使者である「趙良弼」（日本の鎌倉時代中期に、当時大陸を支配していた蒙古の使者）

と同姓であったので、「再び蒙古（元）の使者がやってきた」と勘違いし、趙秩の渡した国書は前回と同様、「蒙古を追い払って立てた王朝の使者」とであると自称してはいるものの、実際は「方便」だと思い込んだ懐良親王は趙秩を一刀のもとに切り捨てるよう命じた。

それに対して、趙秩は「私は蒙古の使者ではない。中華の皇帝（明皇帝）の使者として来たのだ。信用できないのなら殺すがよい。しかし、私を殺せば皇帝は黙ってしまい。きっと日本に遠征することになるだろう。我が王朝の軍は蒙古を蹴散らした天兵だ。ひとたび戦争になれば天命がどちらにあるかははっきりしてくる。我が王朝は蒙古と違い礼を最も重んじる国だから、あなたも礼をもって対応していただきたい。」（『明太祖実録』）と強く表明して、あらゆる手段を尽くし懇々と親王の認識の間違いを指摘し、明帝国太祖洪武帝の威勢と現在の東アジアの情勢とを説明した。

ついに懐良親王は趙秩の説明に納得し、中国側の史料『明太祖実録』によれば、これを聞いた懐良親王は深く感動して趙秩の手を取り、礼を尽くして対応したと記され、さらには朝貢を決意したとも記されている。

1371年10月、日本国王良懐の使者祖来という僧侶が、献上物の馬と方物を携え、留学僧9人と倭寇の捕虜になった被虜男女70余人を引き連れて明国を訪れたことも『明太祖実録』に記録されている。

1372年（明・洪武5、日本・文中元）洪武帝は返答使として、4回目の明使、仲猷祖闡・無逸克勤一行に趙秩が先導役となり、明の大統暦（明の暦＝大統暦とは中華帝国が朝貢国からの国書に記させるために使わせる暦で、これを賜ると言うことは相手を正当な独立国家として認めることを意味した）などを持たせて、派遣した。

東アジア史上、趙秩は洪武帝の使者として、日明の国交締結という難問を解決した第一人者であることに間違いはない。日明両国の友好および東アジア海域の国際秩序の安定との両面に大きく貢献した当代随一の英雄とも言えるだろう。

趙秩が2度目に日本に派遣された時、日本は時あたかも南北朝争乱の渦中にあり、これに巻き込まれて、彼は博多に抑留されたのであった。

この抑留中の趙秩を山口に招いたのが、大内弘世であった。

二、趙秩の山口入り

1372年（応安五）、日本では、北朝方の太宰府攻略にかかわった大内弘世は、全軍四千の兵を引き上げて山口に帰った。多分そのとき、抑留されていた趙秩は大内弘世に連れられて、山口へ来たのかもしれない。

『大内氏史研究』（御園生翁甫著）その他の史料によれば、1372年（応安五）の冬、既に大内領

内に招要された趙秩らは、翌年の1373年の秋頃まで、山口に滞在した。

(趙秩は11月末に博多に移り、1374年明に帰ってしまうのである。)

大内弘世は、大内24代の当主で、「西の京」の新都城山口の町を創設し、その衛門を長春城、西庁を日新軒と称し、大内弘世はこの日新軒（山口古熊にあった守護所、大雄山永興寺）に趙秩等を招じたといわれる。

1372年冬から翌年10月にかけて、大内弘世が趙秩をこの新興都城山口に招いたのは、種々の歴史資料によって、大胆で深謀な政治力の持主である大内弘世に政治上の考えがなかったとは言えないが、中国文化、歴史愛好から出た可能性が多分にある。趙秩は何を思って大内弘世の招きに応じたのであろうか。

三、山口十境詩について

1、山口十境詩の作者

「十境」の、境は、さかい、場所という意味があり、「十境」という言葉は当時、中国・朝鮮・日本の各大禅寺では広く流行している。禅寺の諸堂伽藍と周りの自然環境とを有機的に組み合わせた清閑にして沈深、座禅修行するにふさわしい風景十か所である。

山口十境とは、山口十景ともいい山口の十の景色の詩ということだろう。

河野通毅氏は山口市史（昭和46年刊）の中で「十境詩の出処については、不幸にして未だ明らかにするを得ない。」と指摘された。趙秩の作った詩は「雲門一曲（春屋妙葩編）」に収録されているものもあるが、十境詩の方は入っていない。だから、趙秩の作品とするのに疑義を抱く向きもある。

しかし、十境詩の文句、引用典故から中国に永年居住して、その風土習俗に馴染んできた者でなければ、容易に賦し得ない。例えば「虹橋跨水」の承句「鞭石尋仙興未休」は秦始皇の不老長寿、仙薬を捜し求める物語を、「鰐石生雲」の起句「禹門点額不成竜」は後漢桓帝頃の出世競争の物語を、「氷上滌暑」の「異國更無河朔飲」は光禄大夫劉松が袁紹の部下とともに飲酒で暑気を払う「河朔飲」の故事などそれぞれ中国史に有名な物語、伝説を引用している。

趙秩が山口に滞在した期間、勿論、今の重要な観光地である香積寺（瑠璃光寺）五重塔、国清寺（洞春寺）など大内の有名な社寺はまだ世に出ていない。山口の名勝景観を十境として漢詩にする由来は、趙秩自ら山口の十の景色を選んで賦詠したか、それとも、大内弘世に頼まれたか、後世の研究者に任せるほかはない。

山口に華開いた大内文化の遺産について「日本を訪れた明使趙秩は、文中元（1372）年冬から翌年10月にかけて山口を訪れ、その景観を十境として漢詩に詠みこんだ。現在も当時の景観をしのぶことができる場所が残されている。」と紹介している。

山口県立図書館では山口十境詩で詠われた名所と、それぞれの漢詩を紹介している。十境詩(漢詩十音)でしのぶ大内時代の山口の名勝を展示し、山口十境詩を“地図で確認!”江戸時代の作といわれる「山口古図」の復刻版も展示している。同時に、「山口十境詩は弘世に請われ、趙秩が山口の名勝十ヶ所を選び詠んだ漢詩である。」とも紹介している。

山口十境詩の作者はだれかということをも山口県みずからまず明言したものと思う。

2、山口十境詩碑の整備

平成15年1月、山口市は『大内文化まちづくり推進計画』を発表した。

第5次山口市総合計画(2000～2010)の前期基本計画のまちづくり戦略の中の個性戦略の重要プロジェクトとして、『大内文化まちづくり』を総合的かつ計画的に推進するための指針を示した。このような背景のもと、2003年度より「山口十境詩」を過去の歴史を辿って、検証し、見直す中で、新たに大内文化を発掘し、山口市の町づくりに資することを願って、「山口十境詩」について検証し、資料の整理・整備箇所の確認及び石碑の基礎デザインを作成し始めた。

湯田温泉地区を始め、2008年まで当時の景観をしのぶことができる場所として、いままで大内氷上・大殿地区など7箇所に石碑を建立してきた。

この事業により、山口市民及び山口を訪れる多くの人々の目に見える形で大内文化を再認識できるようになった。

3、山口十境の題名と詩碑の所在地

- ①、清水の晩鐘(宮野下恋路)
- ②、氷上に暑を滌く(大内氷上)
- ③、南明の秋興(大内御堀)
- ④、泊瀬の晴嵐(宮野江良)
- ⑤、猿林の暁月(古熊)
- ⑥、象峰の積雪(大内川向)
- ⑦、虹橋、水に跨がる(天花)
- ⑧、鰐石に雲を生ず(鰐石)
- ⑨、梅峰の飛瀑(法泉寺)
- ⑩、温泉の春色(湯田)

四、山口十境詩の訳注

1、清水晩鐘（宮野下恋路）

山口県山口市宮野下恋路にある。

寺伝によると806（大同元）年の創建で、はじめは天台宗であったが、29世大内政弘の時代に真言宗に転じたといわれる。大内氏・毛利氏はともに本寺の保護に意を用い、現在の観音堂は26世大内盛見の建造、30世大内義興が重建と伝えるが、細部の様式から室町末期のものと推定されている。宝永7年（1710）毛利吉元、宝暦12年（1762）毛利重就、寛政3年（1791）毛利治親により、それぞれ修理され棟札も現存している。（山口県文化財要録より）

2008年5月、清水寺の境内に「清水晩鐘」の詩碑が完成。その詩碑は地元産の変成岩（高さ1.2メートル、横0.8メートル、奥行き0.5メートル）で、重さ1.2トン。

「清水晩鐘」という詩は、趙秩が夕暮れ、清水寺の鐘の音に懐郷の念に浸っている。

（仮名による中国語の発音）

チン	シュイ	ワン	ヂョン																
清	水	晩	鐘																
ムー	ユン	シュ	ユー	ユー	シアオ	フン		ドウ	リー	シー	フォン	バン	イェン	メン					
暮	雲	疎	雨	欲	消	魂		独	立	西	風	半	掩	門					
ダー	ネイ	フォン	トウ	チン	シュイ	スー		ヂョン	シオン	ジン	クェア	ジー	フウアン	フン					
大	内	峰	頭	清	水	寺		鐘	声	驚	客	幾	黄	昏					

（中国現代の簡体字とそのピンイン）

Qīng	shuǐ	wǎn	zhōng																
清	水	晩	钟																
mù	yún	shū	yǔ	yù	xiāo	hún		dú	lì	xī	fēng	bàn	yǎn	mén					
暮	云	疏	雨	欲	消	魂		独	立	西	风	半	掩	门					
dà	nèi	fēng	tóu	Qīng	shuǐ	sī		zhōng	shēng	jīng	kè	jǐ	huáng	hūn					
大	内	峰	头	清	水	寺		钟	声	惊	客	几	黄	昏					

（注釈）

○七言律詩。韻字、魂・門・昏。

○清水寺 山口市宮野下恋路にある真言宗御室派の古刹、山口盆地で最も古い寺とされる。清水寺は山号を花瀧山と称し、千手観世音菩薩を本尊とする真言宗の寺で、縁起によると、平城天皇の御代（806～809）の創建と伝えられ、境内には、山口県指定文化財が三件ある。

○晩鐘 暮鐘。入相（いりあい）の鐘。

○暮雲 夕ぐれの雲。

- 疎雨 まばらに降る雨。
- 消魂 気が遠くなる。極度の悲しみや喜びなどで気を失って、魂が抜けそうになる。
- 西風 秋の風。
- 大内峰頭 大内から宮野へと続く山並みの山頂。
- 客 旅人。ここで趙秩自身のことを指す。
- 黄昏 夕ぐれ

(書きくだし文)

清水の晩鐘	[せいすいのばんしょう]
暮雲疎雨、魂消えんと欲す	[ぼうんそう、たましいきえんとほつす]
独り西風に立てば、半ば門を掩ざす	[ひとりせいふうにたてば、なかばもんをとざす]
大内峰頭、清水寺	[おおうちほうとう、せいすいじ]
鐘声、客を驚かすこと幾黄昏	[しょうせい、かくをおどろかすこといくこうこん]

(通訳)

清水寺の夕暮れの鐘声

夕ぐれの雲を眺め、疎らに降る雨の音にじっと耳を澄ましていると、魂が消え入りそうになる。折から一陣の秋風が門扉を半ば吹き閉じたりする。大内地域の連峰の頂上に位置している清水寺の境内、夕暮れごとに鳴り響き、入相の鐘の音は異郷に滞留している私に懐郷の思いをかきたてるのである。

鐘声といえば、中国の蘇洲寒山寺の鐘声と唐代の詩人張継の有名な『楓橋夜泊』「姑蘇城外寒山寺、夜半鐘声到客船（蘇州城外にある寒山寺の夜中の鐘の音が、客船にまで聞こえてくる）」の詞文は数え切れないほどの人々に憧れを抱かせる。

仏教の教義によると、人間は年間に108のいろいろな煩惱を持っている。しかし、鐘声を聞くと、煩惱が取り除かれるばかりか、知恵も高め、悟りをも開ける。また、詞の「暮雲疎雨欲消魂」、と「独立西風半掩門」から、趙秩の孤独と鬱々とした心情が非常に明らかである。

平成14年6月、中日国交回復30周年記念に際して、中国浙江省杭州市銭塘のとある会館で「清水の鐘」が披露された。聴衆は日本旅行団の方々と地元（銭塘）の人たちである。

これは前年4月、荒巻大拙氏が作詞、城戸邦男氏が作編曲の「清水の鐘」という詩吟歌謡を発表したもの。趙秩の七言律詩「清水の鐘」はこの曲の冒頭と二番の終わりに吟じられている。

2、氷上滌暑（大内氷上）

山口県山口市大内氷上にある。

氷上滌暑は興隆寺（氷上寺）で賦したものである。興隆寺は大内氏の氏寺と言われる。1486年（文明18）に作られた寺の木造扁額「氷上山」は県指定有形文化財である。表には、興隆寺の山号「氷上山」の文字が行書体で彫り込まれ、裏に彫り込まれている文字などから、大内政弘の祈願によって建立された法界門に懸けてあった。書は後土御門天皇の宸筆による。

「氷上滌暑」の詩碑は2004年度建立した。そばに銅板製の解説板を設置した。

(仮名による中国語の発音)

ビン	シャン	ダイ	シュ																	
氷	上	滌	暑																	
グワン	ニン	シャン	シア	イン	チエン	ダイエ		ハン	スエ ^ア	チン	レン	ジュエ	ユー	ヂオン						
光	凝	山	罅	銀	千	疊		寒	色	清	人	絶	鬱	蒸						
イー	グウオ	ゴン	ウー	フェ ^ア	シュオ	イン		ファン	ジン	メイ	イー	ユー	ラン	ツオン						
異	国	更	無	河	朔	飲		煩	襟	毎	憶	玉	稜	層						

(中国の簡体字とそのピンイン)

Bing	shàng	dì	shǔ																	
冰	上	滌	暑																	
guāng	níng	shān	xià	yín	qiān	dié		hán	sè	qīng	rén	jué	yù	zhēng						
光	凝	山	罅	銀	千	疊		寒	色	清	人	絶	郁	蒸						
yì	guó	gèng	wú	Hé	shuò	yìn		fán	jīn	měi	yì	yù	léng	céng						
异	国	更	无	河	朔	饮		烦	襟	每	忆	玉	稜	层						

(注釈)

- 七言律詩。韻字、疊・蒸・層。
- 氷上 地名。山口市大内氷上、山口中心街の南郊にある。
- 滌暑 暑さを避けるために涼しいところに移り住んだり、行ったりすること。滌は濯ぐ、洗い流すという意。
- 凝 凝る、じっと封じて固まるように止まって動かない。
- 山罅 山の隙間、山峡。
- 銀千疊 疊は積み重ね。千疊の「疊」は一重ねのものを数える量詞である。「千疊」は山など幾重にも重なること。「銀千疊」は銀白一色に染められた幾重に重なる谷間の様子。
- 寒色 寒々とした感じを与える色。
- 鬱蒸 鬱は気持ち晴ればれとしないこと。蒸は蒸す、暑くて蒸されていたようになるさま。
- 異国 明国人の趙秩から見て、日本国山口は異国である。
- 河朔飲 夏、もっとも暑い三伏の候に、暑気払いのため、思う存分酒を飲む。痛飲すること。東漢末、光禄大夫（古代の官職の一つ）劉松が袁紹（154年－202年、東漢末年政治家、

軍閥)の部下とともに暑気を払うため、河朔の地で泥酔するまで酒を飲む故事。酒を飲んで暑気払いすることを「河朔飲」という。

- 煩襟 乱れる気持ち。襟は胸のうち、心。
- 憶 回想する、懐かしく思うこと。
- 玉稜層 稜層は山が高く聳え立つさま。玉は美称。

(書きくだし文)

氷上に暑を滌く [ひかみにしよをさく]
光は山罅に凝れり、銀千畳 [ひかりはさんかにこれり、ぎんせんじょう]
寒色は人を清やかにして、鬱蒸を絶つ[かんしよくはひとをすずやかにして、うつじょうをたつ]
異国には、更に無し、河朔の飲、 [いこくには、さらになし、かさくのいん]
煩襟には、毎に憶ふ、玉稜層 [はんさんには、つねにおもふ、ぎょくりょうそう]

(通訳)

夏、焼け付くような太陽の光が氷上の山峽の地に射し込んで、じっと動かない。幾重にも重なる山峽が眩しい銀白一色に輝いている。見る間に、寒々とした寒色が、蒸し暑さを遮断する。他郷に身を寄せているわが身には、酷暑の時期なのに、「河朔の飲」の風習がない。心の中に故郷の高く聳え立つ山々を遥かに偲ぶばかりである。

「河朔飲」は元々は軍人が豪放でさっぱりして、痛飲、泥酔で暑気を払うことである。飲酒により発汗して涼しさを感じることもある。本当に暑気が払われるかどうかわからないが、異国に身を委ねて、思う存分に酒を飲みたい気持ちはあるであろう。詩人の、離れて久しい故郷に対する懐かしさを深く心底にしまっている心境が読者に伝わる。

3、南明秋興（大内御堀）

南明は南明山。臨済宗南禅寺派乗福寺の山号。山口県山口市大内御堀にある。

南明秋興は乗福寺で賦したもの。乗福寺は大内重弘が正和元年（1312）に創建した寺で守護所も兼ねた。元応2年（1320）重弘没後はそのまま菩提寺となる。大内氏始祖琳聖太子供養塔、22世大内重弘、24世大内弘世の墓がある。

(仮名による中国語の発音)

ナン	ミン	チイウ	シン														
南	明	秋	興														
ジン	ユー	ロウ	タイ	ヨン	ツェイ	ウエイ		ナン	シャン	チイウ	スエア	リアン	ジアオ	ホウイ			
金	玉	楼	台	擁	翠	微		南	山	秋	色	両	交	輝			
シー	フォン	ルウオ	イエ	ユン	メン	ジン		ムー	ユー	ユー	ライ	ソン	ウェイ	グウェイ			
西	風	落	葉	雲	門	静		暮	雨	欲	来	僧	未	帰			

(中国の簡体字とそのピンイン)

Nán	míng	qiū	xìng														
南	明	秋	兴														
jīn	yù	lóu	tái	yōng	cùi	wēi		nán	shān	qiū	sè	liǎng	jiāo	huī			
金	玉	楼	台	拥	翠	微		南	山	秋	色	两	交	辉			
xī	fēng	luò	yè	yún	mén	jìng		mù	yǔ	yù	lái	sēng	wèi	guī			
西	风	落	叶	云	门	静		暮	雨	欲	来	僧	未	归			

(注釈)

- 七言律詩。韻字、微・輝・歸。
- 秋興 「興」は漢詩の表現・修辞による分類の一。草や鳥など自然界のことから起こし、それとなく人間世界にたとえる手法。
- 金玉 金銀珠玉、宝物など貴重なもののたとえ。
- 楼台 高殿、高樓、高い建物（多くは詩や劇曲に用いられる）。
- 擁 取り囲む。だきかかえる。おおう。
- 翠微 青緑の山の色。
- 南山 南明山。乗福寺の山号。
- 両交輝 金玉の楼台と青緑の山の色が互いに照り映える。
- 西風 秋風。
- 雲門 高くそびえる山門。
- 暮雨 夕暮れに降る雨。
- 僧未帰 乗福寺四世住持寰中崇枢。1368年絶海中津らと渡明し、当時は不在。

(書きくだし文)

南明の秋興	[なんめいのしゅうきょう]
金玉の楼台、翠微を擁し	[きんぎよくのろうだい、すいびをようし]
南山の秋色、両つながら輝を交ふ	[なんざんのしゅうしょく、ふたつながらきをまじふ]
西風、葉を落として雲門静かなり	[せいふう、はをおとしてうんもんしづかなり]
暮雨、来たらんと欲して僧未だ帰らず	[ぼう、きたらんとほっしてそういまだかえらず]

(通訳)

金銀珠玉をちりばめた高い建物は青々とした山に囲まれて、乗福禅寺の秋景色は楼台と翠微の色どりが互いに照り映えて美しい。折から一陣の秋風が吹いて、樹々の葉は舞いながら境内に散り敷いて、山門のあたりは、ひっそりと静まりかえっている。夕暮れの雨が降りそうな気配がしているのに、住持は明国に渡ったまま帰ってくるけはいがない。

詩の中に「暮雨欲來僧未歸」の「僧」は資料によって、渡明したまま帰らない四世寰中崇枢や親友絶海中津のことであることがわかる。

4、泊瀬晴嵐（宮野江良）

(仮名による中国語の発音)

プオ	ライ	チン	ラン																
泊	瀬	晴	嵐																
フェイ	イェン	フェイ	ウー	ツェイ	グワン	ミイ	グー	コウ	エン	リエン	リー	イン	デイ						
非	烟	非	霧	翠	光	迷	谷	口	雲	連	日	影	低						
ドウ	ダオ	ツオ	エ'ァ	シャン	スエ'ァ	スー	イー	シー	イー	シー	ルウオ	ヤン	シー						
都	道	嗟	峨	山	色	似	依	稀	疑	是	洛	陽	西						

(中国の簡体字とそのピンイン)

Pó	lài	qíng	lán																
泊	濼	晴	嵐																
fēi	yān	fēi	wù	cui	guāng	mí	gǔ	kǒu	yún	lián	rì	yǐng	dī						
非	烟	非	霧	翠	光	迷	谷	口	云	连	日	影	低						
dōu	dào	cuō	é	shān	sè	sì	yī	xī	yí	shì	Luò	yáng	xī						
都	道	嗟	峨	山	色	似	依	稀	疑	是	洛	阳	西						

(注釈)

- 七言律詩。韻字、迷・低・西。
- 泊瀬 山口市宮野下江良にあった泊瀬寺。本尊は十一面観音。(国宝)
- 晴嵐 晴れた日にたなびく霞、山気が蒸発して昇るもの。
- 煙 煙やもやのようなもの。
- 翠光 きらきら輝く緑色。
- 迷 ぼんやりかすんで見える。
- 谷口 谷川の入り口あたり。
- 連 切れることなく続く。連なる。
- 日影 日光。ここでは夕日。
- 都道 人々は口をそろえて言う。

○嵯峨 京都の西北郊にある。地名の由来については坂あるいは険しいなどの地形に由来。(ほかに中国西安郊外の「嵯峨山」を「嵯峨山」とも読む。(フリー百科事典『ウィキペディア』) 趙秩は中国西安郊外の情景を連想したかも知れない。

○依稀 よく似ている。

○洛陽 ここでは日本国京都のこと。(洛陽は中国河南省北部の一つの都市名。後漢・魏・西晋・北魏などの都として栄えた。趙秩のイメージには河南省洛陽もあったであろう。)

(書きくだし文)

泊瀬の晴嵐

[はせのせいらん]

煙に非ず霧に非ず、翠光迷ふ

[もやにあらずきりにあらず、すいこうまよふ]

谷口に雲連なりて、日影低し

[こくこうにくもつらなりて、にちえいひくし]

都べて道ふ、嵯峨、山色似たり

[すべていふ、さが、さんしょくにたり]

依稀たり、疑ふらくは、是、洛陽の西なるか、と

[いきたり、うたがふらくは、これ、らくようのにしなるか、と]

(通訳)

もやでもなければ、霧でもない、目の前の翠の景色がほんやりかすんで見える。泊瀬の谷川の入り口には夕暮れの雲が一片一片連なって、夕日は低く西に傾いている。人々は口々にここ泊瀬の地一帯はなんと京都の郊外嵯峨の景色によく似ていることかと言う。まことに、京都の西北郊ではないかと思まがうばかりである、と。

京都への憧憬、京都を模倣して、西京山口を造ろうとした大内弘世であったから、京都の美景についての描写も趙秩は絶えず聞いただろう。しかし、運命で、京都とは縁がなかった。目の前の情景に接して、大自然の美しさに陶醉して、中国人たる趙秩は故郷の洛陽をも連想、感慨を深くして、故郷への思いが自然にわいて来たかも知れない。

5、猿林暁月 (古熊)

猿林に23世大内弘幸の塔所がある、山口県山口市古熊は、臨濟宗大雄山永興寺(廃寺)の所在地。大内氏の守護所を併設。寺址に1618年、毛利輝元が北野天神を遷座。(古熊天神)

(仮名による中国語の発音)

ユアン	リン	シアオ	ユエ																
猿	林	曉	月																
シュ	スエ ^ァ	チュ	フェン	テイ	エン	ユー	シュ	ウアン	チー	チー	ツァン	ユエ	バン						
曙	色	初	分	天	雨	霜			凄	々	残	月	伴	琳	琅				
シャン	レン	イー	チュ	ウー	シアオ	シー			ジン	チー	アイ	ユアン	コン	ドウ	アン	チャン			
山	人	一	去	無	消	息			驚	起	哀	猿	空	斷	腸				

(中国の簡体字とそのピンイン)

Yuán	lín	xiǎo	yuè																
猿	林	曉	月																
shù	sè	chū	fēn	tiān	yǔ	shuāng			qī	qī	cán	yuè	bàn	lín	láng				
曙	色	初	分	天	雨	霜			凄	凄	残	月	伴	琳	琅				
shān	rén	yī	qù	wú	xiāo	xī			jīng	qǐ	āi	yuán	kōng	duàn	cháng				
山	人	一	去	无	消	息			惊	起	哀	猿	空	断	肠				

(注釈)

- 七言律詩。韻字、霜・琅・腸。
- 猿林 山口県山口市古熊にある。往時、永興寺の僧が猿に餌（え）づけして飼育していたという。
- 曉月 夜明けに西の空にかかっている残月。有明け月。
- 曙色 明け方のうすあかり。明けほのの色。
- 雨霜 霜が降っている。雨は雪・露などが地上にふるという意。
- 凄々 冷え冷えとしてさま。
- 琳琅 精美な玉石。玉が触れ合って鳴る美しい音色。
- 山人 隠遁者。資料によって、ここでは正平8（1353）年に病没し、古熊の菩提寺、大雄山永興寺境内の猿林に葬られている23世大内弘幸を指す。趙秩は永興寺西庁日新軒に逗留。
- 驚起 驚いて飛び起きる。
- 哀猿 哀惜さわまりない猿の啼（な）き声。
- 断腸 はらわたがちぎれるほど悲しむこと。魂が抜けるほど悲しい。

(書きくだし文)

猿林の曉月 [えんりんのぎょうげつ]
曙色、初めて分かなり天の霜をして雨らしむる、と
[しょくしょく、はじめてあきらかなり、てんのしもをしてふらしむる、と]
凄々たる残月、琳琅を伴ふ [せいせいたるざんげつ、りんろうをともなふ]
山人一たび去って、消息無し [さんじんひとたびさって、しょうそくなし]

(注釈)

○七言律詩。韻字、峰・竜・重

○夜來 昨夜から

○老却 すっかり年老いてしまった。「却」は単音節動詞、形容詞の後ろに置き、結果を表わす。

○溪山 溪流が流れている山。ここではふもとを鱒石川が流れている象頭山のこと。

○玉竜 美しい竜。「竜」は古代から想像上の動物。雲をよんで天に上り、深い淵にひそむ水神。

○便欲 すぐ…つもり・ほしいという意。「便」は副詞。すぐ、ただちに。

○朝 (帝王に) 拝謁する、(神仏に) 参詣する。ここでは竜神に拝謁する。

○帝闕 ここでは竜神の居住する宮殿。玉闕ともいう。「帝」は天帝・神話や宗教における最高神。「闕」は王宮の門前の両脇にある楼。王宮、宮殿のこと。

○瑶階 美しい玉石をちりばめた階段。「瑶」は美しい玉のこと。

○瓊宇 立派な廟堂。「瓊」は立派である。「宇」は廟宇とも。

○重重 幾重にも重なっているさま、重複するさま。

(書きくだし文)

象峰の積雪

[ぞうほうのせきせつ]

夜來の積雪、象頭の峰

[やらいのせきせつ、ぞうずのみね]

老却したる溪山、玉竜に變ず

[ろうきゃくしたるけいざん、ぎょくりゅうにへんず]

便ち竜に乗りて帝闕に朝せんと欲す

[すなわちりゅうにのりてていけつにちようせんとほつす]

瑶階瓊宇、更に重重

[ようかいけい、さらにちようちよう]

(通訳)

昨夜からの雪が象頭山の峰々をすっぽり覆い隠している。歳月を経た象峰はたちまちに雄姿颯爽たる竜に変身してしまった。すぐさま、竜の背に飛び乗って、雲上の竜神の宮殿に参詣しようと思った。しかし願いはかなわず、空を突くばかりにそびえ立つ宮殿に達する美しい宝石をちりばめた階段が、幾重にも重なってきらきら輝いているばかり。

詩人が目の前の象峰の雪景色の美しさに陶醉し、雪に覆われた象頭山を中国人がずっと昔から崇拜する竜と想像して、強い竜の神通力を借りて、自分の使命を完遂したいか、それとも懐かしい故郷に帰りたいと揺れる趙秩の気持が表われていると思う。使命感に燃えている熱情がよく判るようである。けれども、現在、明使として、担っている使命は「瑶階瓊宇 更重重」のままである。

7、虹橋跨水（天花）

虹橋 山口市天花の七尾山と古岳と山峡を東流する一の坂川にかかっていた反り橋で、五重塔から天花方面に向かって行く途中にあった。今はダムにより水没。詩碑は2km下流の山口市木町橋畔。

(仮名による中国語の発音)

ホン	チアオ	クア	シュイ														
虹	橋	跨	水														
パン	ジン	チョウ	ユー	ジエ	ドン	リユー		ビエン	シー	シュン	シエン	シイン	ウエイ	シュー			
盤	浸	斃	玉	接	東	流		鞭	石	尋	仙	興	未	休			
ジェ	デア	ズー	ホン	フェイ	ユー	チュ		フー	サン	フェア	チュ	シー	サン	ヂュウ			
借	得	紫	虹	飛	欲	去		扶	桑	何	處	是	三	洲			

(中国の簡体字とそのピンイン)

Hóng	qiáo	kuà	shuǐ														
虹	桥	跨	水														
pán	jìn	zhòu	yù	jiē	dōng	liú		biān	shí	xún	xiān	xìng	wèi	xiū			
盘	浸	斃	玉	接	东	流		鞭	石	寻	仙	兴	未	休			
jiè	dé	zǐ	hóng	fēi	yù	qù		fú	sāng	hé	chù	shì	sān	zhōu			
借	得	紫	虹	飞	欲	去		扶	桑	何	处	是	三	洲			

(注釈)

- 七言律詩。韻字、流・休・洲
- 跨水 川にまたがる。川は一の坂川。
- 盤浸斃玉 水中に没した岩や美しい平らな岩。
- 接 迎える。出迎える。
- 東流 東に流れる一の坂川（中国の川の多くも東に流れるから、東流は川のこととも）。
- 鞭石尋仙 秦の始皇帝が長い石橋を造り海を渡って東方の神仙界に移り、日の出る処を見ようとした。海に投げ入れる石を神人が鞭で打つと、その石が真赤に染まったという故事。
- 興 神仙界へのあこがれ。
- 未休 とまらない、止まない。終わることが無い。心から願ったり望んだりする意を表す。
- 借得 借得はもし借りることができたら…（仮定条件）。
- 紫虹 虹は空中に弓状にかかる七色の竜で、にじの意を表わす。紫は帝王、神仙などに関する事物に冠する語。
- 扶桑 神木の名。神木のある国。日本の別名。
- 三洲 東海中にあって、神仙が住んでいる不老不死の島々（渤海中にある蓬莱・方丈・瀛洲）。

(書きくだし文)

虹橋、水に跨がる

[にじばし、かわにまたがる]

盤浸瑩玉、東流に接じふ

[ばんしんしゅうぎよく、とうりゅうにまじふ]

石を鞭うち、仙を尋ねて興未だ休まず [いしをむちうち、せんをたずねてきょういまだやまず]

借りに紫虹を得なば、飛んで去らんと欲す [かりにしこうをえなば、とんでさらんとほつす]

扶桑、何れの処か、是、三洲

[ふそう、いずれのところか、これ、さんしゅう]

(通訳)

水中に没した岩や美しい平らな岩が東流する一の坂川を出迎える。秦の始皇帝がかつて長い石橋を造って海を渡り東方にある不老長寿の神仙の世界を求めたように、わたしも神仙界を求めていまだ興味が尽きない。もしも仮に(木造の虹橋ならぬ)大空にかかるあの虹の橋を渡ることができるなら、そのまま空中を浮遊してこの人間界から去ってしまいたい。(願いがかない、大気に乗り、高く昇って下界を見おろして探すのだが、茫々(ほうほう)とかすんで神仙の国はどこにも見あたらない。) いったい、神仙の住むという、扶桑(日本)は何処にあるのか。また三洲はいづこにありや。

8、鰐石生雲(鰐石)

鰐石の重ね岩には松が植えられしめ縄も巻かれ、傍らに石の灯籠がぼつんと立っている。

(仮名による中国語の発音)

エ ア シー ション ユン
鰐 石 生 雲

ユー メン デイエーン エア ブー チョン ロン
禹 門 点 額 不 成 竜

ズー シー イェン シア ディアオ アオ チュー
自 是 煙 霞 釣 鰐 處

ユー シー リュー シー レン ジー チョン
玉 石 流 溪 任 激 衝

ジー チュン タイ シイエーン バイ ユン フォン
幾 重 苔 蘚 白 雲 封

(中国の簡体字とそのピンイン)

E shí shēng yún
鰐 石 生 云

yǔ mén diǎn é bù chéng lóng
禹 门 点 额 不 成 龙

zì shì yān xiá diào áo chù
自 是 烟 霞 钓 鰐 处

yù shí liú xī rèn jī chōng
玉 石 流 溪 任 激 冲

jǐ chòng tái xiǎn bái yún fēng
几 重 苔 蘚 白 云 封

(注釈)

○七言律詩。韻字、竜・衝・封。

- 鰐石 地名、山口市鰐石。詩の中の「鰐石」は山口市中心街から東へ向かって、鰐石橋を渡る手前に巨岩二箇が重なり合う重岩のこと。中心街の東南の入り口に位置するこの鰐石は往時は水陸交通の要衝で、山口に出入りする旅客の歓送迎がここで行われた。
- 禹門 竜門の別名。「竜門」は中国黄河の上流にある峡谷の名。急湍で、流れをさかのぼる大魚も容易にはこれを登りきれない。登りできれば竜に生まれ変わるという伝説がある。「登竜門」は出世することを意味する。
- 点額 登竜の反対を意味する言葉で、「点」は傷つける意。鯉が竜門を登りできれば竜となるが、登れず失敗した鯉は竜になれない、額に傷をつけて下流に転落する。
- 流溪 谷川に流れる。
- 激衝 激しく突き当たる。「激」は激しい、急湍である。「衝」は水が勢いよくぶつかる。押し流す。
- 自是 当然。もちろん。
- 烟霞 霧ととかすみ。
- 鰲 伝説における大海（大湖）中に棲息する想像上の大きな「大海亀」
- 苔蘚 こけ
- 封 封ずる。境界（不老長寿の神仙界）をつくる。

(書きくだし文)

鰐石に雲を生ず	[わにいしにくもをしょうず]
禹門の点額、竜と成らず	[うもんのてんがく、りゅうとならず]
玉石、溪に流れて激衝に任す	[ぎょくせき、たにながれてげきしょうにまかす]
是より煙霞、釣鰲の処	[これよりえんか、ちょうごうのところ]
幾重の苔蘚、白雲封ぜり	[いくえのたいせん、はくうんほうぜり]

(通訳)

禹門を登れず額を傷つけ、竜（英雄・王者）になれなかった私は失敗に終わった。目の前の鰐石川には玉石が混交して、流れのはげしさに任せている。ここはもややかすみがちこめて、仙人が大亀を釣る不老不死の仙界である。岩には幾重にも苔が生え、白雲が神仙界をつくっている。

「鰐石生雲」は趙秩が不老長寿の神仙界を描いて大内氏の永劫の平和と繁栄を祈願している。

唐代文人李白の詩に、「点額して竜と成らず、帰来するに凡魚を伴なう」（贈崔侍御詩）という字句があり、同じ禹門点額の記事をふまえている。

竜は想像であるもので、王者、英才のたとえ、「点額」は競争の敗北者、落第坊主のたとえであ

る。詩人は「象峰の積雪」の詩文の「便ち竜に乗り帝闕に朝せんと欲す」という文で、竜の神通力を借りたいという願望、思いをぶちまけたが、「禹門の点額、竜と成らず」のように不成功の気持ちをも洩らしている。

昌霖（妙葩の弟子梅岩昌霖）を鰐石まで送って別れるときに、趙秩は「鰐溪折柳送君帰 柳色依依露未晞（鰐溪に柳を折りて、君の帰るを送る、柳色依々として、露未だ晞かず）」（『雲門一曲』）という詩を賦した。今、鰐石の重ね岩とその鰐溪川は六百余年前の明使趙秩のことを知っているか。

9、梅峯飛瀑（法泉寺）

法泉寺は山号、梅峰山、開山は円悟碩溪（北朝崇光天皇の皇子）、24世大内弘世が山口滝町に創建し、29世大内政弘が中興開基となり重建した臨濟宗寺院である。大内氏滅亡後、毛利輝元が廃寺としたが寺号と大内政弘の位牌、寺宝の一部は宇部市榎小野に伝えられ、のち、浄土真宗に改宗し山号も竜岩山と改めて名刹の寺号を留めている。

（仮名による中国語の発音）

メイ	フォン	フェイ	プー											
梅	峰	飛	瀑											
イン	フェア	シェイ	ワン	ユー	ロン	シアン		バイ	リエン	ジュエン	ヤー	バイ	チー	チャン
銀	河	誰	挽	玉	竜	翔		白	練	懸	崖	百	尺	長
ベン	シアン	メイ	シャン	ユー	ファ	ルウオ		ジャエン	レン	ヂユ	ユー	ダイ	チン	シアン
噴	向	梅	梢	雨	花	落		濺	人	珠	玉	帯	清	香

（中国の簡体字とそのピンイン）

méi	fēng	fēi	pù											
梅	峰	飞	瀑											
yín	hé	shuí	wǎn	yù	lóng	xiáng		bái	liàn	xuán	yá	bǎi	chǐ	cháng
銀	河	谁	挽	玉	龙	翔		白	练	悬	崖	百	尺	长
pēn	xiàng	méi	shāo	yǔ	huā	luò		jiàn	rén	zhū	yù	dài	qīng	xiāng
喷	向	梅	梢	雨	花	落		溅	人	珠	玉	带	清	香

（注釈）

- 七言律詩。韻字、翔・長・香
- 梅峰 山口市滝町にあった梅峰山法泉寺の西側を流れる滝。東側の滝を白糸の滝という。
- 飛瀑 滝が高いところから激しく流れ落ちるさま。
- 銀河 天の川の別称。
- 挽 引っ張る。
- 翔 空高く天翔（あまが）ける。

- 白練 白くて柔らかくてつやのある絹。練は煮て柔らかくしたねり絹。
- 懸崖 切り立ったがけ、絶壁。
- 百尺長 物の長さの誇張形容。
- 噴 急に勢いよくふきだす。水しぶき。
- 梅梢 梅の木の枝の細い先端。
- 雨花 水滴を含んでいる梅の花。
- 濺 粉末状・液状のものを少量、上から散らすようにしてかける。ふりそそぐ。
- 珠玉 美しく立派な真珠や宝玉。ここで水玉の意。
- 帯 持つ、含み持つ。

(書きくだし文)

梅峰の飛瀑	〔ばいほうのひばく〕
銀河、誰か挽く、玉竜の翔	〔ぎんが、たれかひく、ぎょくりゅうのしょう〕
白練、崖に懸かれり、百尺の長	〔はくれん、がけにかかれり、ひゃくしゃくのちょう〕
噴きは梅の梢に向こうて、雨花落つ	〔しぶきはうめのこずえにむこうて、うかおつ〕
人に濺ぐ珠玉は、清香を帯びたり	〔ひとにそそぐしゅぎょくは、せいこうをおびたり〕

(通訳)

銀河は誰が天空へと引っぱっているのだろうか、玉竜が颯爽として天宮へと飛翔する雄姿は、その直下に高い崖（がけ）の上から白い練り絹のような滝がかかっている。その長さといったら百尺ほどもあろうか。瀧のたぎり落ちるしぶきが、梅の梢に向かって勢いよく吹きつけ、水をふくんだ梅の花びらははらはらと散ってゆく。滝を仰ぎ見る人々に降りそそぐ真珠のようなしずくは、梅の清らかな香りをしっとりと帯びている。

高い崖から飛散してきた水の簾の前、梅の花の香気がぷんと匂って、身も心も洗い清められたようになった。

昔から、文人墨客の間で瀑布について人口に膾炙する詩詞が今まで伝わっている。李白の七言絶句『望廬山瀑布（廬山の瀑布を望む）』の詩に「日照香炉升紫烟，遥看瀑布挂前川。飛流直下三千尺，疑是銀河落九天！（日が香炉峰を照らして、山が紫色に煙っている、竜がはるか長い川のようにかかっているのが見え、滝がまっすぐに流れ落ちてくる。その長さは三千尺ほど、まるで銀河が空から落下してきたようだ）。』『望廬山瀑布水』の詩に「西登香炉峰，南見瀑布水。挂流三千丈，噴壑数十里。」『廬山遥寄卢侍御虚舟』の詞に「金闕前開二峰長，銀河倒挂三石梁。香炉瀑布遥相望，回崖沓嶂凌蒼蒼。」と。瀑布と言ったら、「三千尺」、「三千丈」、「三石梁（山の脊）」、

「数十里」と誇張法を用いて、同時に、「銀河」の言葉も多用されているし、銀河が空（九天）から「直下」、「挂流」落ちるとか、逆にぶら下がる「倒挂」とかの表現方法も多用されている。

10、温泉春色（湯田）

山口市湯田温泉は泉都町、泉町、上湯田、下湯田あたり一帯。熊野権現（大内弘世が紀伊国熊野三所権現より勧請）の裏山に棲む白狐が傷めた足を池で癒していたのが温泉発見の端緒。

（仮名による中国語の発音）

ウェンチュエンチュン スェ`ァ
温 泉 春 色

シャンチュアンシュー ユン イン ヤン タン ティエン デイ チュ チォン ザオ ファ ルー
山 川 秀 孕 陰 陽 炭 天 地 铸 成 造 化 炉

シュイシィエン ユー オウ ティエン パオ ホウ パイ フェン チュン スェ`ァ ダオ ドン ユー
誰 献 玉 鷗 天 宝 後 派 分 春 色 到 東 隅

（中国の簡体字とそのピンイン）

Wēn quán chūn sè
温 泉 春 色

shān chuān xiù yùn yīn yáng tàn tiān dì zhù chéng zào huà lú
山 川 秀 孕 阴 阳 炭 天 地 铸 成 造 化 炉

shuí xiàn yù ōu tiān bǎo hòu pài fēn chūn sè dào dōng yú
谁 献 玉 鷗 天 宝 后 派 分 春 色 到 东 隅

（注釈）

- 七言律詩。韻字、炉・隅。起句末は踏みおとし。
- 山川 山と川。自然。
- 秀孕 孕は子をはらむこと。物をふくんでふっくらする。秀は優雅で美しいさま。
- 陰陽 陰と陽。天地間の万物を作る二気。エネルギー。
- 炭 燃料。木炭。エネルギーのたとえ。
- 天地 天と地、世界のたとえ。
- 铸成 物のある型に作り上げる。金属を溶かして型に流し込んで器物を作る。
- 造化 天地万物を生み出す力。また、その神。
- 献 献上する、奉げる。
- 玉鷗 体が美しく、飛ぶ力が強いユリカモメ。
- 天宝 中国唐の玄宗皇帝の年号。(742~756)
- 派分 派（わ）かれ、分かれる。
- 東隅 中国から見て東方の国日本東隅は山口湯田。

(書きくだし文)

温泉の春色	[おんせんやしゅんしよく]
山川、秀孕たり、陰陽の炭	[さんせん、しゅうようたり、いんようのたん]
天地、鑄成せらる、造化の炉	[てんち、ちゅうせいせらる、ぞうかのろ]
誰か献じけむ、玉鷗、天宝の後	[たれかけんじけむ、ぎよくおう、てんぼうののち]
派分して、春色、東隅に到る	[はぶんして、しゅんしよく、とうぐうにいたる]

(通訳)

山口湯田の自然(山川)は姿がすぐれふっくらとしている。これは陰の気を陽の気が激突して流れ出る溶岩が造りあげた結晶である。すなわち天地万物は天然の溶鉱炉の中で鉱物を溶かし鑄型にはめて造りだされたものなのだ。誰が唐の玄宗の治世、天宝ののちまでも美しいユリカモメを献上したのであろう。それが派かれ分かれて、ついに東方の国日本の一隅にまで飛んできて、周防の湯田の川面にその可憐な姿を浮かべ春景色を美しく描き出している。

五、おわり

趙秩は山口の景色を賛美する「山口十境」という詩篇以外に、山口博物館に趙秩筆と伝える「寿老花鳥図三幅対」の軸があり、中幅は「寿老図」、左右両側は「花鳥図」。中幅の寿老図に「辛巳之春日写於鴻城客舎以寿落水園主人百歳錢塘趙秩(辛巳之春日鴻城客舎に於いて写し以て落水園主人の百歳を寿ぐ)」とある。

「山口十境」の作者は本当に趙秩であるかという疑問の声を余所(よそ)にして、「寿老花鳥図三幅対」には趙秩の署名落款があるから、作者に対して、何の疑いも入れない。しかし、辛巳の年は1401年で、趙秩が山口に来たのは1372(壬子)1373年(癸丑)なので干支と年号が合わない。これに対して、趙秩が1401年再び日本に再訪したという説もあれば、趙秩の描いた絵が1401年来日した明使によって日本に将来されたという説もある。しかし、趙秩の三回目の来日についての記録が、今まで発見されていない。

江戸(毛利藩政)期、趙秩の「山口十境」は寺子屋の教科書(庭訓往来)に、あるいは明治期には山口師範学校附属小学校第四学年用テキストにも所載されている。(付録)

趙秩の「山口十境」及び春屋妙葩編の漢詩文集『雲門一曲』に掲載された詩文、また、収蔵されていた趙秩筆の「寿老花鳥図三幅対」など、山口県立博物館、防府毛利博物館にだけ所蔵、埋もれたままにしておくのは、余りにも惜しい。

山口市では2003年度から、山口十境詩を刻んだ石碑の建立に着手しはじめた。「山口十境詩」についての著書も幾冊か出版されている。

趙秩は明の洪武皇帝の特使として、日明の交渉の幕を開けた功労者で、現在両国の交流史の研究には無視できない重要な人物の一人である。しかし、現存の資料に記載が少ないうえ、中国、日本一方だけ記載したのも極めて少ない。

今まで、趙秩について推断しかできない未知の問題、もっと真剣かつ、詳しく研究を続けなければならない問題がたくさん残されていると思う。

・南北朝争乱の時期、二度も日本に派遣されて、博多に抑留された趙秩はどうして、守護大名大内弘世に身を寄せるべく、山口を訪れたのか。二人の動機は那邊にあるのか。

・趙秩と同時期に山口にいる他の中国人、或は、中国文化、歴史を熟知している日本人が「山口十境」を作った、或は、一部を作った可能性は全然ないか。

・「寿老花鳥図三幅対」の描く干支と年号が趙秩の山口に滞在する年号とは一致しない事実は何を意味するか。

今後はとりあえず、まず以上の疑問を巡って研究していきたいと思う。諸賢のご教示を冀う。

[参考・引用文献]

- 荒巻大拙著 山口十境詩考 平成11年 自家出版
- 荒巻大拙著 山口十境詩 平成18年 山口市赤れんが
- 荒巻大拙著 田梅訳 日中対訳山口十境詩 平成20年 イストワール 大内文化
- 御園生翁甫著 大内氏史研究 昭和34（1959）年刊 マツノ書店
- 河野通毅編 山口市史 昭和46年刊
- 河野通毅編 大内村誌 昭和33年 マツノ書店
- 陳小法 《佚存东瀛的赵秩诗文》 文献2005
- 金本利雄 『山口十境詩余話 鱒溪の詩』 「ふるさと山口第16号」
- 大内文化の遺産
- www.city.yamaguchi.lg.jp/sekaiisan/ohuchi_heritage/23.html
- 大内文化まちづくりプロジェクト～山口十境詩整備～
- www.city.yamaguchi.lg.jp/ouuchi/information/information/04.html
- 山口県文化財要録
- bunkazai.ysn21.jp/general/summary/frame.asp?mid=20037&cdrom=

付録

『山口十境』を踏まえた郷土史教育資料

一、江戸期の「庭訓往来」(寺子屋の教科書) 所載のもの

やまぐちじゅうきょう
山口十境

あらたま はるた く もろびと こころのどか おも た みやこ ゆ めぐ やまぐち じゅうきょう ちょうか
新玉の春立ち来れば、諸人の心長閑に思ひ立つ、都をここに行き回る、山口しるき十境は、趙可
よう とて みるひと よ おきし の おおうち さか み よ すがた かぞ
庸とて明人の詠みて置きしぞ俣ばるる。むかし大内の盛んなる、御代の姿のありありと、数ふそ
の 名 まぎ みち ともどちさそ おんせん しゆんしよく ゆ あ ひ あたは ひと あそ
の名の紛れなき、道の朋友誘ひつれ、まづ温泉の春色に湯浴みする日の温かに、いづくの人も遊
び来る、袖の香払ひ吹く東風に、散る梅峰の飛瀑をば、玉の柳の水はとて、汲む手開かなかくその
うえ くも うえびとめ な わ かえ みなかみとお やまづた いわ ね みちたか
上も、雲の上人愛でられし、いさぎよき名と湧き返る、水上遠き山伝ひ、ゆく岩が根の道高く、
懸け渡せるは虹橋の、紫虹もよしや快く、旅の衣や装ふらん。辿り辿りて足引きの、山の麓にや
がて入り、泊瀬の晴嵐程なくも、里を隔てて伝へ聞く、清水寺の晩鐘に、驚かれつつ仮初めの、
やど もと くさまくら みやこ ゆめ むす ま う こえごえ じつ えんりん ぎょうげつ あわ もよお さむしろ
宿り求めて草枕、都の夢を結ぶ間も、憂さをましらの声々は、実に猿林の曉月と、哀れ催す狭筵
に、山のかひもやなかるらん。うしろ険しく峙たし、深山木分けて世の中も、夏の日ぐらし憂さ
し 知らず夏を氷上の滌暑とは、呼ばふその名もむべなれや。陰に隣山つづき、登り降りて尋ぬれ
ば、日も南明の秋興と、木々の紅葉の色々に、錦織りなす霧時雨、むら群雲の通ふをも、三つ
に 架けなす 鱧石の、生雲凝りて白妙に、見渡す方は象峰の積雪深く日を経りて、寒をいとと添
えぬべし。冬籠りしてまた春を、まつの宿りの手遊びに、木の葉搔きため田居の子に、道のしる
べを 残しまるらせ候。

ゆき き こおり と ほる ひ うつ と き うめ さ
雪も消え氷も解けて春の日の移らふ時や梅も咲くらん。

二、「霜堤雑草山口しるべ巻一」(明治四〇<1907>年度版。近藤清石著。

山口師範学校附属小学校第四学年用) 所載のもの

(一) 氷上に暑を滌く(大内氷上) 一山をばあとに顧みて、山の端近き氷上橋、渡れば山口十境
の、一にかぞへし氷上山、大内氏の氏神と、祀る妙見氏寺と、みがき造れる興隆寺、勅願所にて
死穢を忌み、大門前に下馬の石、上下の妙見、釈迦堂は、七間五尺一寸の、桁行にして大伽藍、
あまたの社仏の堂、その僧坊は一百余、国滅びし後大坊の外六坊となりぬれど、古式伝へて厳め
しき、寺家なりけるが今は夢、大門・楼門、麦畑、釈迦堂址は農学校、されど琳聖将来の、冠・
つるぎ ふえ ほか どうぶ ひたれ がくいしやう いて そほう かめんるい もんじよ つた ほっけみょうてんほちかん
剣・笛の外、童舞の直垂・楽衣装、射手の素袍に仮面類、文書もあまた伝はれり、法華妙典八卷
は、大内時代の彫りかた木、世に珍しき物ぞかし。……

(二) 南明の秋興(大内御堀) 一琳聖しばし居住せし、大内寺は跡知れず、南明山の乗福寺、大内
うじ ごほだいじ しげひろ ひろよ ごりんせき きゅうちやう いしとうば りんしょうたいし もの しちどうがらん だいち
氏の御菩提寺、重弘・弘世の五輪石また九重の石塔婆、琳聖太子の物といふ。七堂伽藍の大地

にて、もと奥まりてありけるが、永正年中焼失し、今の処に移りけり。文書・伽藍図・台天目、
蛟の頭を蔵したり。蛟は大内弘盛の射殺されたる物といふ。その旧跡は不見が溪、御堀の八幡
遥拝し、過ぎゆく道の山際に、上田・服部先生の、二つの碑あり、上田氏は、通称茂右衛門山口
に、講習堂の創業者。……

(三) 象頭の積雪 (大内川向) 一応永年間大内氏、いつき祭りし巖島、御堀に移り……この山こ
そ象頭山。麓の社巖島、鰐石橋のかなたなる、名に負ふ鰐石里人の、神とや注連を引くならん。

……

(四) 鰐石に雲を生ず (鰐石) 一 (該当の文章なし)

(五) 猿林の暁月 (古熊) 一永福禅寺の前を過ぎ、その旧跡の古熊の、猿の林に来て見れば、暁
月夜影落ちて、弘幸朝臣の奥つ城の標の石に霜白し。……

(六) 清水の晩鐘 (宮野下恋路) 一三の宮仁壁は式に見る社、織り機といふ神事あり、川を渡りて
恋路てふ、里は越路の横なまり、音羽の滝は涸れぬれど、名こそ流るれ清水寺、そなたにあはと
粟が岳…。

(七) 泊瀬の晴嵐 (宮野江良) 一大内氏の笠掛けを射し跡どころ、それを名に負ひしも今は初瀬の
原、初瀬の池あり観音の、堂は山の上晴嵐を、もて十境のその初瀬は、ここにはあらず元長谷
と、今いふ所七尾は、城跡なりと人いへど、陣址のごとし……。

(八) 虹橋、水に跨る (天花) 一こなたの岸よりかなたなる、岸に架かれる虹橋は、明の国より
山口に、使ひに来たりし趙秩が、漢詩作れる山口の、十境といふその一よ。……

(九) 梅峰の飛瀑 (法泉寺) 一色うるはしき銀杏谷、谷の水の上梅が峰、落ち来る瀑布の清き香
を添へて袂にそそぐなり。法の泉の旧刹は、年の名天文二十歳の、秋の葉月の修羅の庭、またも
来て見よもろこしの、よしや吉野とうたはれし、名も名残りは夏草の、茂り茂りて仏殿や、経蔵
檀や風呂が谷、車止め石、山門檀、また方丈が岳などと、いふ名はあれど跡どころ、探りかぬ
るを柏檣の、老い木ぞ独り我れは顔、谷川渡り奥深く、辿り辿りて名に負へる、柳の清水掬びつ
つ、かへる弓手に御荒野や、政弘卿の墳墓あり…。これにならひて兵部卿、師成親王御法名、
竺源惠梵の御墓あり。

(十) 温泉の春色 (湯田) 一袖解橋は大内氏の、栄えし昔しらぬ火の、筑紫より来る侍の、旅
の装ひの狩衣の、袖のくくりを此処にして、解くに起これる名なりとぞ。湯田の縄手の一本松、
官務小槻の墓じるし、枯れて跡とふ人もなし。前町過ぎて湯屋の町、旅籠所も賑はひて、浮かれ
めが着る綾絹や、結ぶ帯さへ錦橋、湯気に霞める春景色、風なほ寒き如月も、竹の子の生ひ荷葉
の、緑もありと古書に、見えてゆかしき所がら…。

注①『霜堤雑草』の「霜堤」は編者近藤清石の号。

注②『庭訓往来』、『霜堤雑草』ともに学習の便宜をはかり、旧漢字を常用漢字に、変体仮名を通

用の仮名に、また、平仮名の部分も、適宜、漢字に改めた。

注③『霜堤雑草』の記述の順序は、『山口十境詩』の順序に合わせて並べ替えた。

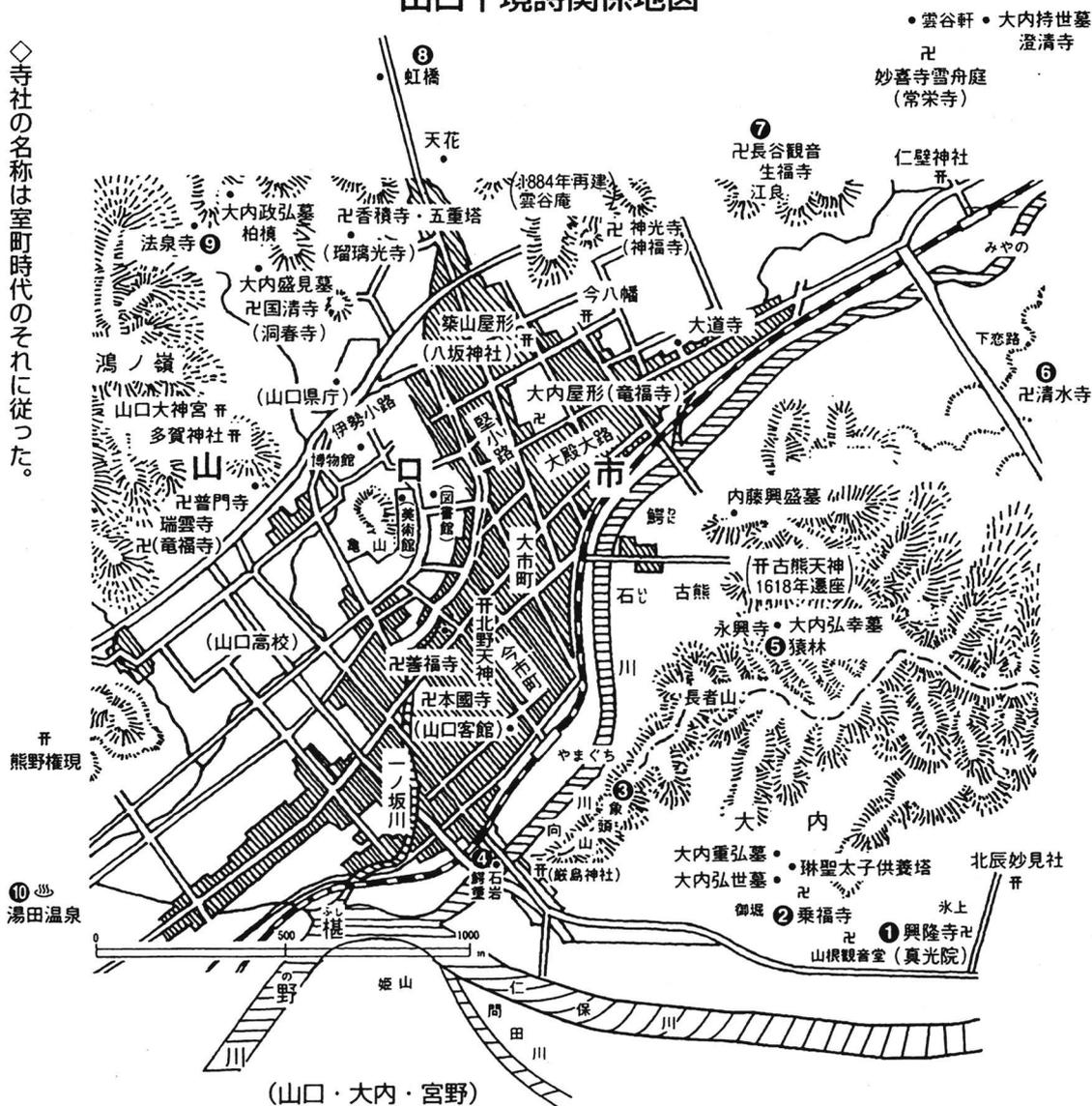
(田 梅：山口大学大学機構・留学生センター教授)

(荒巻 大拙：元山口県立下関南高校校長「大内文化を正しく伝える会」)

付図1「山口十境詩」関係地図

山口十境詩関係地図

◇寺社の名称は室町時代のそれに従った。



山口十境詩

<p>⑤ 猿林の暁月 (古熊)</p> <p>④ 鰐石に雲を生ず (鰐石)</p> <p>③ 象峰の積雪 (大内川向)</p> <p>② 南明の秋興 (大内御堀)</p> <p>① 氷上に暑を漉く (大内氷上)</p>	<p>⑥ 清水の晚鐘 (宮野下恋路)</p> <p>⑦ 泊瀬の晴風 (宮野江良)</p> <p>⑧ 虹橋、水に跨がる (天花)</p> <p>⑨ 梅峰の飛瀑 (法泉寺)</p> <p>⑩ 温泉の春色 (湯田)</p>
---	--

